

「記紀」から読み解く

『魏志』倭人伝とその後の倭国

田口紘一(著) 海鳥社 二〇一九年二月一日発行

定価二〇〇〇円

倭人伝最後に登場する張政は戦略をもって狗奴国に勝利した。その戦略を記紀から読み解いた。そして陳寿は宮殿に残る史料から倭国像を創ったという仮説、および「記紀」にはその原作というものを創った人物がいるという仮説、つまり思考の範囲を拡げ、さらに考古学的知見、現在まで続いている事跡などを駆使して倭人伝の後の倭国の姿の展開を示した。

「記紀」の神代七代以降の神や人は、実在人物をモデルに描かれていることが推定された。天照大神は卑弥呼十台与、神功皇后は倭人伝記事を除いては台与、素戔嗚尊は狗奴国王、仲哀天皇は卑弥呼のあとの男王、張政は高皇産靈尊や住吉大神として登場する。応神は初代と三代で、三代を応神にするため「名の交換譚」を創った。

